

職業観の形成に影響を及ぼす要因に関する研究

Research on the Factors that Influence the Formation of Student's Vocational Values

巽 公一

Kimikazu TATSUMI

拓殖大学工学部

Takushoku University

Faculty of Engineering

【要 旨】

本研究は、大学生を対象に、職業に対する考えなどについて調査し、職業観の形成に影響を及ぼす要因について検討した。その結果、以下のことが明らかになった。(1)多数の支持が得られている共通する職業観は、正規社員になり経済的安定と自立を獲得し、自分の専門性を発揮しつつ社会に貢献できる仕事をし、無事で安定した生活を送りたいという考え方である。(2)職業観について分類したところ、個性重視群、進路模索群、地位優先群の3つの群に分けられた。(3)職業観の形成に影響を及ぼす要因として、教師及び親、自分の趣味、インターネットの情報及び書籍、授業及び部活動がそれぞれ大きい。(4)職業観の形成には、職業人のモデルから啓発を受ける機会があること、興味・関心を高める学びの機会があること、自分の能力が評価される機会があることなどが必要である。

キーワード：職業観，形成要因，大学生の調査

Summary

This study investigates university student's vocational values. Then, this study examines the factors that influence the formation of them.

The results conclude the following. 1) The vocational values shared by many students include the following: They desire to become regular employees, keep economic stability, and achieve independence. They desire to work in a position that utilizes their expertise and helps them contribute to society. They also desire a stable and secure life. 2) The vocational values have been classified into three groups: personality consideration group, route exploring group, and position prioritization group. 3) The major factors that influence the formation of the vocational values are as follows: (a) teachers and parents; (b) their hobbies, information on the Internet, and books; and (c) their classes and club activities. 4) The following aspects are necessary in forming student's vocational values: (a) opportunities to receive enlightenment from a role model; (b) learning opportunities that enhance their interests and concerns; and (c) receiving opportunities to have others evaluate their abilities.

Keywords: vocational values, formation factors, research on university students

1 はじめに

今日、若者の社会的・職業的自立に課題があり、学校から社会・職業への移行が円滑に行われていないとの指摘がなされている。コミュニケーションなど職業人としての基本的な能力の低下、職業意識や職業観の未熟さ、精神的・社会的自立の遅れ、進路意識や目的意識が希薄なまま進学する者の増加などがその要因とされている¹⁾。とりわけ、望ましい勤労観・職業観を確立することは、社会的・職業的自立を図るキャリア教育にとって最も重要な課題の一つである。

職業観についてこれまでのいくつかの見解を整理する。尾高²⁾は「職業は個性の発揮、役割の実現および生計の維持という三つの要素に関係づけられている。・・・たとえばある人びとは生計の維持を偏重し、その結果として職業は生業たるべきであると考え。またある人びとは役割の実現を強調し、その結果として職業は職分たるべきであると主張する。かかるものはすなわち職業観にほかならない。」と職業の三要素に基づき職業観の在り方について述べている。また、加部・田村ら³⁾は「職業観とは、職業に関してもつ個人の観念、見方、考え方、感じ方、態度まで含む、個人の中で起こるすべての職業的現象のことを指すものである。」とその定義を示し、「言い換えれば、職業観とは、個人の職業に対する基本的な認識であり、いわば職業を媒介とした人生観でもあるということができる。」としている。また、国立教育政策研究所（調査研究報告）は「「職業観・勤労観」は、職業や勤労についての知識・理解及びそれらが人生で果たす意義や役割についての個々人の認識であり、職業・勤労に対する見方・考え方、態度等を内容とする価値観である。その意味で、職業・勤労を媒体とした人生観ともいうべきものであって、人が職業や勤労を通してどのような生き方を選択するかの際の基準となり、また、その後の生活によりよく適応するための基盤となるものである。」とし、「「職業観」には、様々な職業の世界及び職業倫理などについての理解や認識など、「勤労観」にない独自の要素が含まれること、一方、「勤労観」では、「職業観」に比べて役割遂行への意欲や勤勉さ、責任感などといった情意面が重視されるなどの違いがある。」と職業観と勤労観との違いを明確に示している⁴⁾。

これらの見解を踏まえると、職業観は個性の発揮、役割の実現及び生計の維持という職業の三つの要素を踏まえた職業に対する個々人の見方・考え方、態度等を内容とする価値観であると捉えることができる。

職業観において重視するものについて、増田・広井によって開発された「職業観診断テスト」（職業観を職業の経済性、職業の社会的価値、職業における自己実現、職業義務感、職業への帰属性の5尺度で診断）を用いて、広井は「中学生から大学生までの職業観の発達過程を調査し、その結果、経済的尺度では学年とともに重視傾向が強まること、社会性尺度は変化なく、自己実現性尺度では高校まで急上昇を示し、これとは逆に義務性尺度は急速な下降を示していることを見出している」⁵⁾。松本⁶⁾は、高校生の職業観の傾向について、生活安定志向、自己実現志向、社会理想志向、地位条件志向、使命役割志向の順に得点が高いことを示し、「社会貢献」や「労働条件」よりも自分の「自立」や「生きがい」を重視しているとしている。筆者の研究⁷⁾では、高校生の職業観において個性発揮型が約4割で最も多く、平穩無事型、私的生活重視型、収入重視型が各約2割で、社会貢献型と地位重視型は極めて少ないことを示している。

職業観の類型については、「職業観診断テスト」の5尺度に基づき、類型化している場合が多いが、各自が重視する考えは複数あり、択一方式や序列化はなじまないことから、大部分の者が共通して支持する考え方と、人によって見解が異なる考え方とを分けた上で類型化する必要があると考える。

職業観の形成に及ぼす要因について、中西・広井⁵⁾らは「職業選択を規定する要因としてモリソンとマッキンタイア(1971)は、①個人の直接的経験、②友人や知人の経験の伝達、③関係するグループの一般的雰囲気などをあげているが、このような直接的・間接的経験が与えられる場としては、家庭、仲間関係、学校からマス・メディアにいたるまでの社会化のエージェントを考えることができる」と述べている。また、松本⁶⁾は、職業観と社会観・人生観との関連、就きたい職業の有無との関連、職業モデルの有無との関連などについて検討し、具体的に就きたい職業をイメージすることや父親、有名人、学校の先生などの正のモデルが存在することが職業の有用性を高く評価することに結びついていることなどを示している。筆者の研究⁷⁾では、高校生の職業観の形成に及ぼす要因について、趣味などの個人の要因、親・親戚・友人・先輩などの家庭や周囲の人の要因、アルバイト・新聞・書物・テレビなどの社会の要因、進路情報や授業などの学校の要因に分類して調査し、趣味や関心ごとなどの個人の要因が最も大きく、進路情報や授業などの学校の指導の影響が小さいことなどを示している。

職業観の形成に影響を及ぼす要因として、職業モデルとして周囲の人からの影響、学校における学習や諸活動などの体験からの影響、学校外における家庭生活、地域活動、趣味の追求、メディアからの情報などの影響などが考えられる。職業観の形成に影響を及ぼす要因を明らかにすることは、今日指摘されている若者の未成熟な勤労観・職業観の解決策を検討する上で重要である。

2 研究の目的

本研究では、大学生を対象に、職業に対する考え及びその際に影響を受けたものなどについて調査し、職業観を類型化し、それぞれの類型の特徴から職業観の形成に影響を及ぼす要因を探ることとした。

職業に対する考えについては、前述した「職業観診断テスト」における5つの尺度に、職業と私生活とのバランスに対する考えを加え、経済的自立、社会的地位、個性の発揮、社会的役割、雇用形態、仕事と生活の6分野について調査することとした。

また、職業観の形成に影響を及ぼす要因については、人からの影響、学校外での影響、学校での影響に区分し調査することとした。

3 調査内容・方法

3.1 調査 I

- (1) 調査時期 平成24年7月
- (2) 調査対象 A 大学生
- (3) 調査数 202人 (回収率100%)
- (4) 調査方法 質問紙法 (集合調査法)
- (5) 調査内容
 - ① 属性 (4項目)
性別、出身高校の学科、大学の学部、学年
 - ② 職業に対する考え (20項目)
経済的自立 (4項目)、社会的地位 (3項目)、個性の発揮 (5項目)、社会的役割 (2項目)、雇用形態 (4項目)、仕事と生活 (2項目)
 - ③ 職業を考えたとき影響を受けたもの (16項目)

人からの影響（5項目）、学校外での影響（7項目）、学校での影響（4項目）

3.2 調査Ⅱ

- (1) 調査時期 平成24年12月
- (2) 調査対象 A大学生
- (3) 調査数 12人（回収率100%）
- (4) 調査方法 質問紙法
- (5) 調査内容 小学校時代、中学校時代、高校時代及び大学時代の各学校段階において、将来なりたい職業及びその際に影響を受けた人や出来事について、所定の書式に自由に記述させた。

4 調査結果と考察

4.1 調査Ⅰの結果

4.1.1 属性

(1) 性別

調査対象者の性別は、男性154人、女性41人である。男女による職業観の違いを比較することとした。

男性：154，女性：41，無回答：7

(2) 出身高校の学科

調査対象者の出身高校における学科は、普通科155人、専門学科26人、総合学科17人である。

普通科：155，専門学科：26，総合学科：17，無回答：4

(3) 大学の学部

調査対象者の大学における学部は以下のとおりである。

商学部：41，政経学部：63，外国学部：34，国際学部：27，工学部：35，無回答：2

(4) 学年

調査対象者の学年は以下のとおりである。

1学年：77，2学年：60，3学年：50，4学年：12，その他：2，無回答：1

4.1.2 職業に対する考えについて

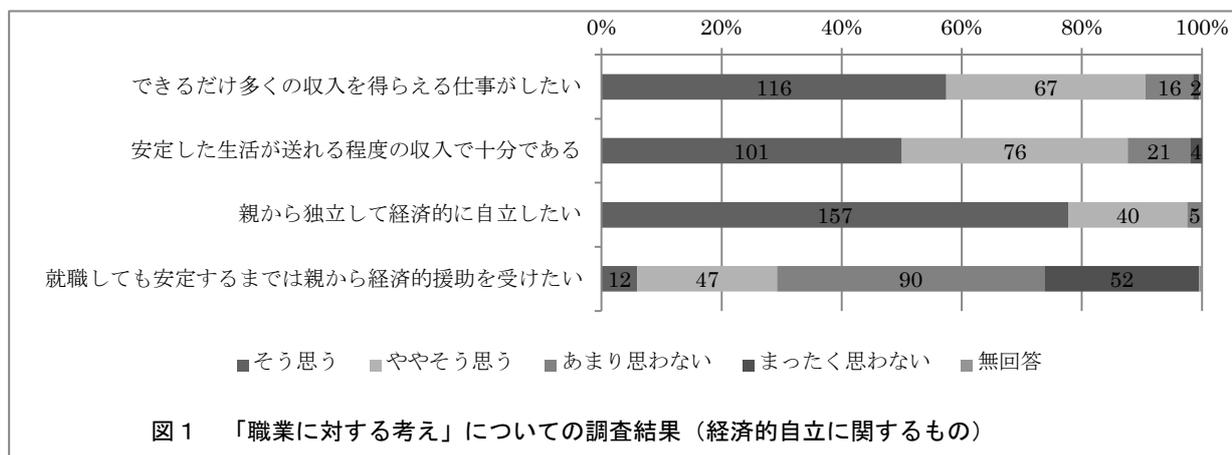
職業に対する考えについて、20の項目について質問した。回答は、「そう思う」、「ややそう思う」、「あまり思わない」、「まったく思わない」の4つの選択肢からそれぞれ選択させた。「そう思う」を4、「ややそう思う」を3、「あまり思わない」を2、「まったく思わない」を1と数値化し、各質問項目の選択肢ごとの回答数、平均値及び標準偏差を求めた。調査結果を表1に示す。

表1 職業に対する考えの調査結果

N o	質問事項	そう 思う	やや そう 思う	あま り思 わな い	まっ たく 思わ ない	無 回 答	平均	標準 偏差	天井 効果	床効 果
1	できるだけ多くの収入を得らえる仕事がしたい	116	67	16	2	1	3.48	0.73	4.21	2.75
2	安定した生活が送れる程度の収入で十分である	101	76	21	4	0	3.36	0.75	4.11	2.61
3	親から独立して経済的に自立したい	157	40	5	0	0	3.75	0.49	4.24	3.26
4	就職しても安定するまでは親から経済的援助を受けたい	12	47	90	52	1	2.09	0.86	2.95	1.23
5	正規社員になり働きたい	160	33	7	2	0	3.74	0.57	4.31	3.17
6	自分に合った仕事なら非正規社員でもかまわない	16	44	98	44	0	2.16	0.85	3.01	1.31
7	気ままに暮らせれば非正規社員でもよい	13	18	67	103	1	1.71	0.89	2.60	0.82
8	将来管理職や幹部職員になり責任ある地位に就きたい	47	71	73	10	1	2.77	0.88	3.65	1.89
9	気楽に過ごしたいから管理職は目指さない	10	55	105	32	0	2.21	0.77	2.98	1.44
10	社会的に評価される地位につき、名誉を得たい	39	79	73	11	0	2.72	0.84	3.56	1.88
11	社会のため人のために役立つ仕事をしたい	104	79	16	3	0	3.41	0.70	4.11	2.71
12	職業を通して社会に貢献することが実感できない	12	35	92	61	2	1.99	0.87	2.86	1.12
13	自分のやりたい仕事以外はしたくない	39	60	85	16	2	2.61	0.92	3.53	1.69
14	専門性を身に付けそれを発揮できる仕事に就きたい	86	80	30	5	1	3.23	0.82	4.05	2.41
15	職業資格を取得しそれを生かした職業に就きたい	77	83	39	3	0	3.16	0.78	3.94	2.38
16	自分に合った仕事は何かわからない	45	66	60	31	0	2.62	1.00	3.62	1.62
17	いろいろな職業を経験し自分に合った仕事を見つけない	45	73	66	18	0	2.72	0.91	3.63	1.81
18	人に使われるより自営や起業などで独立して働きたい	23	43	96	39	1	2.25	0.91	3.16	1.34
19	平凡でも無事で安定した生活が送れるようにしたい	90	80	22	9	1	3.25	0.85	4.10	2.40
20	仕事より自分の生活を楽しむことを優先したい	28	84	86	3	1	2.68	0.75	3.43	1.93

※天井効果：平均+標準偏差 床効果：平均-標準偏差

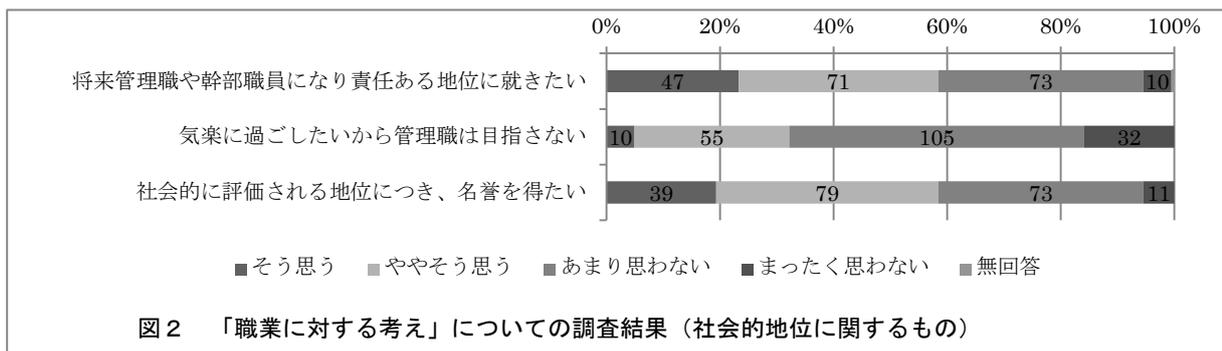
(1) 経済的自立



社会的自立に関する調査結果を図1に示す。収入については、「安定した生活が送れる程度の収入で十分である」に肯定的な回答（「そう思う」又は「ややそう思う」）をしている者が約88%であり、多くが安定した収入を求めている。一方、「できるだけ多くの収入が得られる仕事がしたい」に肯定的な回答をしている者が約90%であり、多くの収入が得られる仕事を望む傾向もみられる。

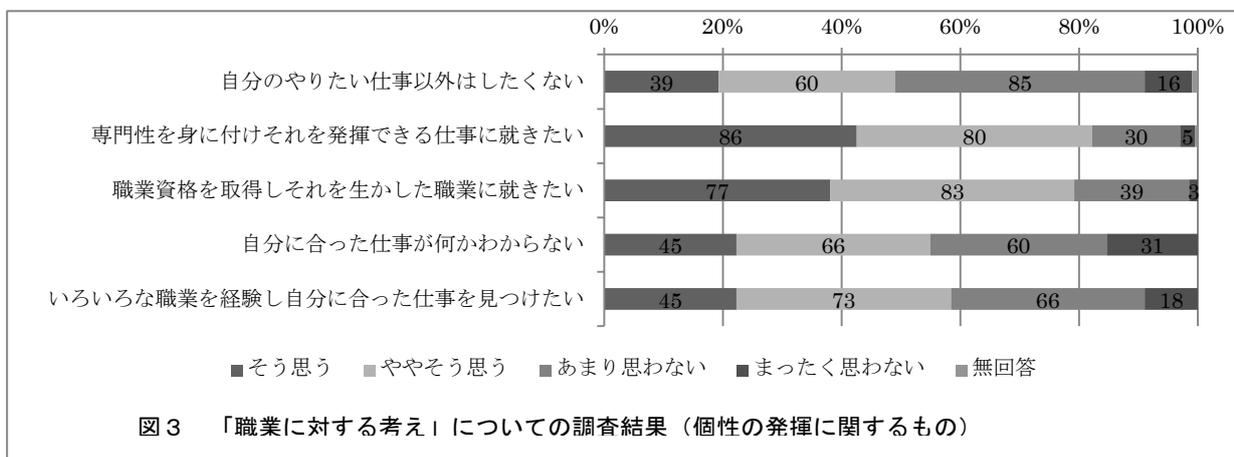
経済的自立については、「親から独立し経済的に自立したい」に約98%が肯定的な回答をしている。一方、「就職しても安定するまでは親から経済的援助を受けたい」に肯定的な回答をしている者が約29%である。

(2) 社会的地位



社会的地位に関する調査結果を図2に示す。「将来管理職や幹部職員になり責任ある地位に就きたい」及び「社会的に評価される地位につき、名誉を得たい」に肯定的な回答をしている者がいずれも約58%である。また、「気楽に過ごしたいから管理職は目指さない」に肯定的な回答をしている者が約32%である。社会的地位を志向する傾向にはばらつきがみられ、二極化している。

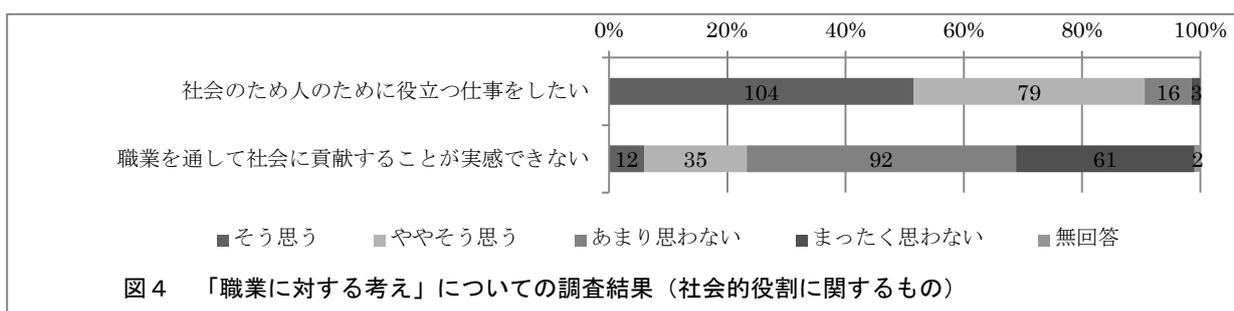
(3) 個性の発揮



個性の発揮に関する調査結果を図3に示す。職業を通して個性を発揮することについては、「専門性を身に付けそれを発揮できる仕事に就きたい」及び「職業資格を取得しそれを生かした職業に就きたい」に肯定的な回答をしている者がそれぞれ約83%、79%である。また、「自分のやりたい仕事以外はしたくない」に肯定的な回答をしている者が約49%であり、個性の発揮を何よりも優先するという考え方もみられる。

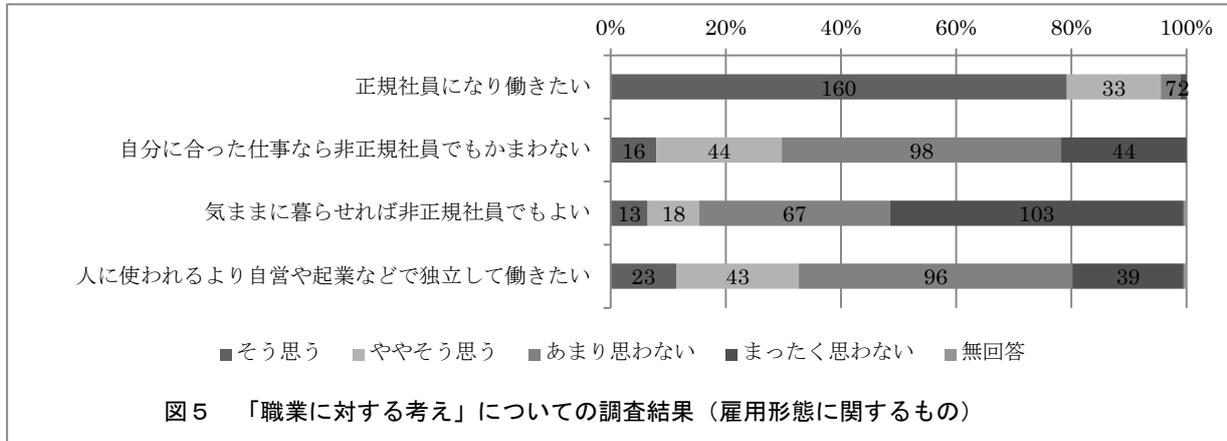
また、自己の適性の把握については、「自分に合った仕事がかかわからない」及び「いろいろな職業を経験し自分に合った仕事を見つけない」に肯定的な回答をしている者がそれぞれ約55%、約58%である。職業に対する自己の適性を十分に把握できず模索している者が比較的多いと言える。

(4) 社会的役割



社会的役割に関する調査結果を図4に示す。社会的役割の認識については、「社会のため人のために役立つ仕事をしたい」に肯定的な回答をしている者が約90%である。一方、「職業を通して社会に貢献することが実感できない」に肯定的な回答をしている者が約23%であり、社会貢献の意志はあるが、具体的に実感できない者がいる。

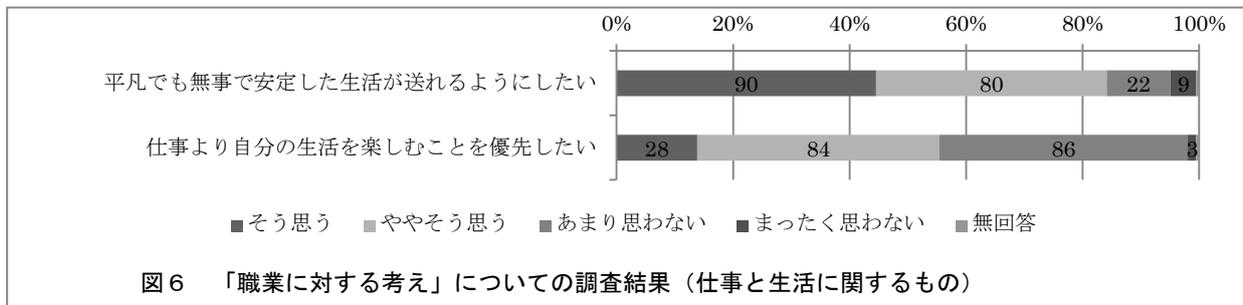
(5) 雇用形態



雇用形態に関する調査結果を図5に示す。「正規社員になり働きたい」に肯定的な回答をしている者が約96%である。一方、「自分に合った仕事なら非正規社員でもかまわない」及び「気ままに暮らせれば非正規社員でもよい」に肯定的な回答をした者がそれぞれ約30%、約15%である。

また、自営や起業志向については、「人に使われるより自営や起業などで独立して働きたい」に肯定的な回答をした者が約33%である。

(6) 仕事と生活



仕事と生活に関する調査結果を図6に示す。仕事と生活とのバランスについては、「平凡でも無事で安定した生活が送れるようにしたい」に肯定的な回答をしている者が約84%であり、「仕事より自分の生活を楽しむことを優先したい」に肯定的な回答をしている者が約55%である。

4.1.3 職業を考えたとき影響を受けたもの

職業を考えたときに影響を受けたものに関して、「人からの影響」5項目、「学校外での影響」7項目、「学校での影響」4項目、合わせて16項目について質問した。回答は、「たくさん影響を受けた」、「少し影響を受けた」、「あまり影響を受けなかった」、「まったく影響を受けなかった」の4つの選択肢からそれぞれ選択させた。「たくさん影響を受けた」を4、「少し影響を受けた」を3、「あまり影響を受けなかった」を2、「まったく影響を受けなかった」を1と数値化し、各調査項目の選択肢ごとの回答数、平均値及び標準偏差を求め、表2に示した。また、各調査項目の平均値及び標準偏差のグラフを図7に示した。

「人からの影響」としては、教師からの影響が最も大きく、「たくさん受けた」者が43%である。次に影響が大きいのが親からであり、「たくさん受けた」者が30%である。一方、地域の社会人の影響は少なく、「たくさん受けた」者が11%で、「まったく受けていない」者が32%である。その他影響を受けた人として記述された回答には、先輩、塾の先生、友人の家族、監督、テレビで出ている有名人などがある。

表2 職業を考えるとときに影響を受けたもの（項目ごと）

	人の影響					学校外での影響							学校での影響			
	親	兄弟や親戚	友人	教師	地域の社会人	家庭の仕事	自分の趣味	マスコミ情報	インターネット情報	書籍	地域での活動	習い事	学校での授業	就業職場体験	部活動の経験	生徒会活動
たくさん受けた	60 30%	23 11%	22 11%	87 43%	22 11%	14 7%	72 36%	20 10%	27 13%	27 13%	16 8%	41 20%	62 31%	31 15%	74 37%	21 10%
少し受けた	70 35%	42 21%	77 38%	59 29%	33 16%	56 28%	68 34%	72 36%	83 41%	78 39%	47 23%	43 21%	74 37%	73 36%	50 25%	45 22%
あまり受けない	43 21%	73 36%	56 28%	36 18%	74 37%	84 42%	52 26%	74 37%	60 30%	64 32%	90 45%	70 35%	44 22%	57 28%	46 23%	77 38%
まったく受けない	29 14%	64 32%	47 23%	20 10%	64 32%	43 21%	8 4%	34 17%	29 14%	28 14%	47 23%	45 22%	21 20%	37 18%	30 15%	57 28%
無回答	0	0	0	0	9	5	2	2	3	2	2	3	1	4	2	2
平均値	2.82	2.12	2.37	3.05	2.07	2.21	3.02	2.39	2.54	2.52	2.16	2.40	2.88	2.49	2.84	2.15
標準偏差	1.02	0.99	0.96	1.00	1.05	0.92	0.93	0.91	0.95	0.93	0.90	1.09	0.99	1.02	1.12	0.97

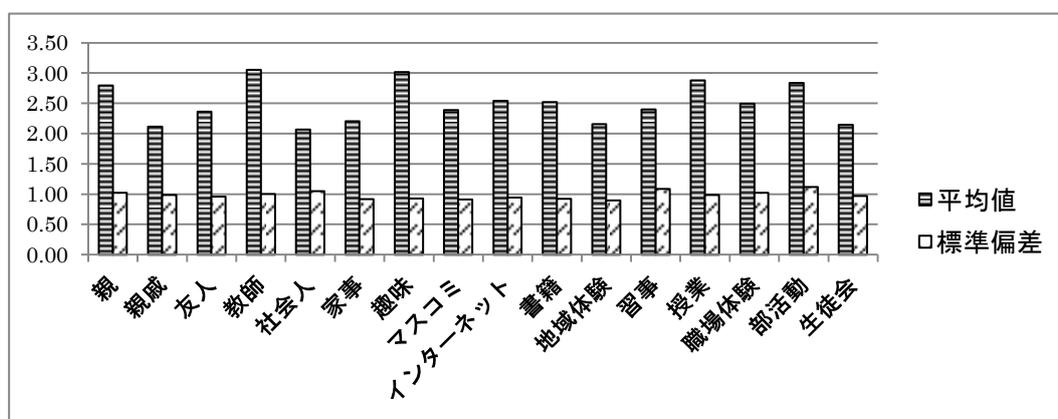


図7 職業を考えるとときに影響を受けたもの（項目ごと）

「学校外での影響」としては、自分の趣味からの影響が最も大きく、「たくさん受けた」者が36%である。次に影響が大きいのがインターネットの情報及び書籍である。習い事については、「たくさん影響を受けた」者が20%である一方、「まったく影響を受けていない」者が22%であり、ばらつきがみられる。家事などの家庭の仕事及び地域での活動については、「あまり受けていない」者と「まったく受けていない」者とを合わせてそれぞれ63%、68%であり、家庭や地域社会での役割体験の影響は少ないことがうかがえる。

「学校での影響」としては、授業からの影響及び部活動の影響が大きく、「たくさん受けた」者がそれぞれ31%、37%である。就業体験や職場体験からの影響については、「あまり受けていない」者と「まったく受けていない」者とを合わせて46%である。

次に、「人からの影響」5項目の合計得点、「学校外での影響」7項目の合計得点、「学校での影響」4項目の合計得点及び16項目すべての合計得点を算出した「総合的な影響」について、それぞれの領域ごとの平均値を表3に示し、「総合的な影響」の分布を図8に示した。領域ごとで比較すると、学校での影響が最も多くなっている。

表3 職業を考えるときに影響を受けたもの（領域ごと）

領域	人からの影響	学校外での影響	学校での影響	総合的な影響
調査項目数	5	7	4	16
平均値	12.3	17.0	10.3	39.9
平均値/項目数	2.46	2.42	2.57	2.49

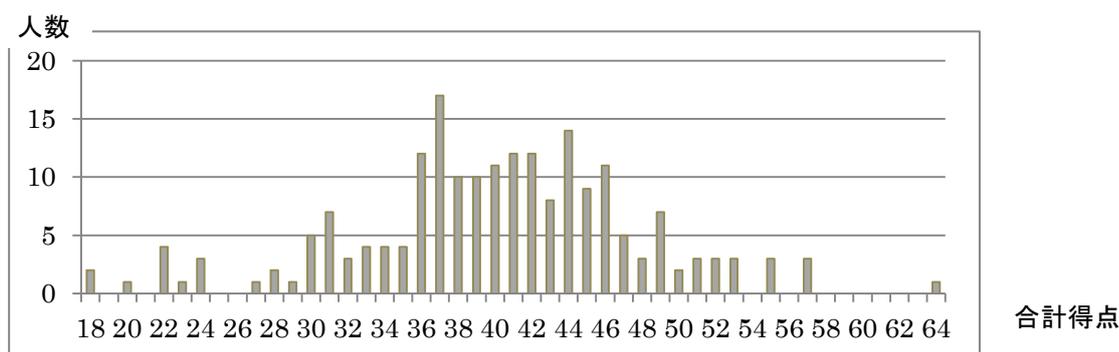


図8 職業を考えるときに受けた「総合的な影響」の得点分布

4.1.4 職業に対する考えに関する因子分析

表1に示した職業に対する考えの調査20項目のうち、多くの者が肯定する項目（天井効果が4を上回る項目）及び多くの者が否定する項目（床効果が1を下回る項目）を除き、12の調査項目に対して因子分析を行った。主因子解、バリマックス回転により行った結果、3因子を抽出した。結果を表4に示す。累積寄与率は28.9%である。

表4 職業に対する考えに関する因子分析結果（バリマックス回転後の因子行列）

		第一因子	第二因子	第三因子	共通性
8	将来管理職や幹部職員になり責任ある地位に就きたい	0.905	0.112	-0.139	0.851
10	社会的に評価される地位につき、名誉を得たい	0.393	0.018	0.13	0.172
9	気楽に過ごしたいから管理職は目指さない	-0.465	0.37	0.25	0.416
12	職業を通して社会に貢献することが実感できない	-0.037	0.352	0.036	0.126
20	仕事より自分の生活を楽しむことを優先したい	-0.044	0.35	0.235	0.18
16	自分に合った仕事がかかわからない	-0.178	0.693	-0.359	0.641
13	自分のやりたい仕事以外はしたくない	-0.023	0.001	0.591	0.35
15	職業資格を取得しそれを生かした職業に就きたい	0.114	0.069	0.478	0.246
17	いろいろな職業を経験し自分に合った仕事を見つけたい	0.028	0.284	0.167	0.109
4	就職しても安定するまでは親から経済的援助を受けたい	-0.089	0.125	0.218	0.071
18	人に使われるより自営や起業などで独立して働きたい	0.245	0.3	0.272	0.224
6	自分に合った仕事なら非正規社員でもかまわない	-0.134	0.174	0.175	0.079
	因子寄与	1.324	1.097	1.042	
	累積寄与率	11.0%	20.2%	28.9%	

第一因子は、「将来管理職や幹部職員になり責任ある地位に就きたい」、「社会的に評価される地位につき、名誉を得たい」、「気楽に過ごしたいから管理職は目指さない」(逆転)の各項目で構成されている。職業を通して社会的地位や名誉を得たいという内容の項目が高い負荷量を示している。「地位志向」因子と命名した。

第二因子は、「自分に合った仕事は何かわからない」、「気楽に過ごしたいから管理職は目指さない」、「職業を通して社会に貢献することが実感できない」、「仕事より自分の生活を楽しむことを優先したい」の各項目で構成されている。自分の生活を楽しむことを優先し、職業に対する考え方があいまいで職業観が未成熟な内容の項目が高い負荷量を示している。「職業離れ」因子と命名した。

第三因子は、「自分のやりたい仕事以外はしたくない」、「職業資格を取得しそれを生かした職業に就きたい」、「自分に合った仕事は何かわからない」(逆転)の各項目で構成されている。自らの個性・能力を発揮したいと強く思う内容の項目が高い負荷量を示している。「個性優先」因子と命名した。

各因子の項目数は第一因子が3項目、第二因子が4項目、第三因子が3項目である。因子ごとに各項目の得点を合計した。なお、第一因子の質問項目 No. 9 及び第三因子の質問項目 No. 16 は逆転項目であるので、選択肢の得点を逆にして算出した。

表5 各因子における男女比較

	男性 (154)		女性 (41)		t 値	p 値
	平均値	標準偏差	平均値	標準偏差		
第一因子「地位志向」	8.40	1.84	7.59	1.80	2.54	<.01
第二因子「職業離れ」	9.44	2.16	9.37	2.20	0.18	>.05
第三因子「個性優先」	8.03	1.86	8.46	1.90	-1.31	>.05

因子の得点が男女による有意な差があるかを調べるため、男女それぞれの平均値を比較し、t 検定を行った。検定結果は表5のとおりで、このことから以下のことが明らかになった。

第一因子「地位志向」の得点は、女子より男子の方が高い。(t = 2.54 p < .01)

4.1.5 クラスタ分析

次に、因子分析による3因子(「地位志向」因子、「職業離れ」因子、「個性優先」因子)の得点を用いて、調査対象者を複数の群に分類するクラスタ分析を行った。3つ因子について、デンドログラムを参考にし、3つのクラスタを導入することとした。

3つのクラスタの人数は、それぞれ92人(45.5%)、45人(22.3%)、65人(32.2%)である。人数の偏りを検討するため、 χ^2 検定を行ったところ、自由度2、 $\chi^2=16.5$ 、p値<.001であり、有意な人数比率の偏りがみられる。

3つのクラスタを独立変数、「地位志向」、「職業離れ」、「個性優先」の各因子を従属変数として分散分析を行った。その結果、「地位志向」及び「職業離れ」については、いずれも有意な群間差がみられた(「地位志向」は $F(2,199) = 96.38$ p < .001、「職業離れ」は $F(2,199) = 144.4$ p < .001)。Tukey 法による多重比較(5%水準)を行ったところ、「地位志向」については、第三クラスタ>第一クラスタ>第二クラスタ、「職業離れ」については、第二クラスタ=第三クラスタ>第一クラスタという結果が得られた。結果を表6及び図9に示す。

表6 職業に対する考えの3つの群における各因子の得点

	群名	人数	平均値 (標準偏差)		
			地位志向得点	職業離れ得点	個性優先得点
第一クラス	個性重視群	92	-0.026 (0.753)	-0.680 (0.475)	0.105 (0.785)
第二クラス	進路模索群	45	-1.02 (0.495)	0.675 (0.542)	0.022 (0.722)
第三クラス	地位優先群	65	0.748 (0.614)	0.495 (0.573)	-0.164 (0.824)

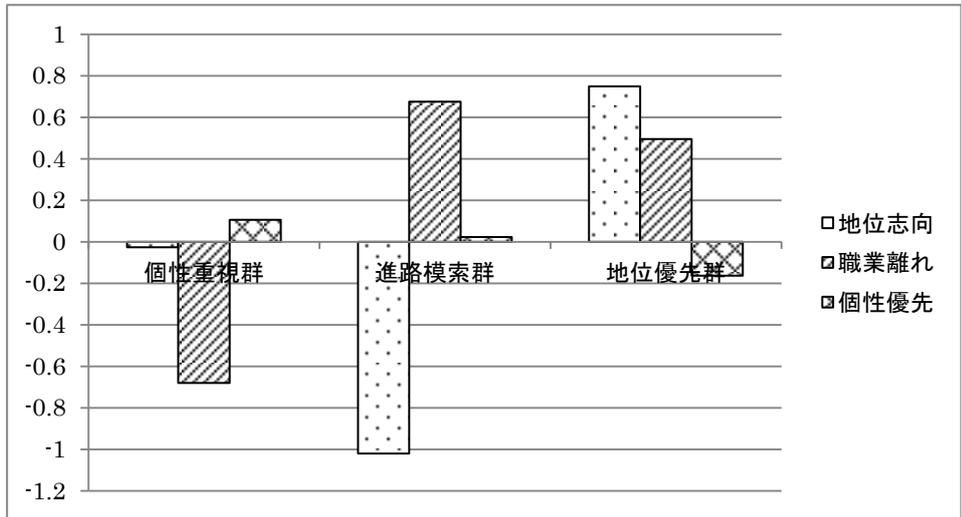


図9 職業に対する考えの3つの群における各因子の得点

第一クラスは、職業に対する義務感や社会的意義についての意識が高く、職業を通して個性を発揮したいと考えているが、名誉や地位への欲求はそれほど高くない群と考えられ、「個性重視群」とした。第二クラスは、自由で気楽な生活を求め職業離れの傾向が強く、名誉や地位への欲求も低く、職業を通して経済的・社会的に自立を図ろうとする意欲に乏しい群と考えられ、「進路模索群」とした。第三クラスは、自由で気楽な生活を求め職業離れの傾向がある一方、地位や名誉への欲求は高い群と考えられ、「地位優先群」とした。

職業に対する考えと職業を考えると影響を受けたものとの間にどのような関係があるかを調べるため、3つのクラスについて、「人からの影響」の合計得点、「学校外での影響」の合計得点、「学校での影響」の合計得点及び「総合的な影響」の合計得点を算出し、それぞれの合計得点の平均値及び標準偏差を表7に、平均値のグラフを図10にそれぞれ示した。

表7 職業に対する考えの3つの群における項目ごとの影響得点

	群名	人数	平均値 (標準偏差)			
			人からの影響得点 (5項目)	学校外での影響得点 (7項目)	学校での影響得点 (4項目)	総合的な影響得点 (16項目)
第一クラス	個性重視群	92	12.79 (2.70)	17.51 (3.63)	10.66 (2.58)	41.18 (6.97)
第二クラス	進路模索群	45	12.38 (2.67)	16.60 (3.99)	9.64 (2.39)	39.07 (6.83)
第三クラス	地位優先群	65	11.58 (3.46)	16.60 (4.61)	10.09 (3.44)	38.71 (9.66)

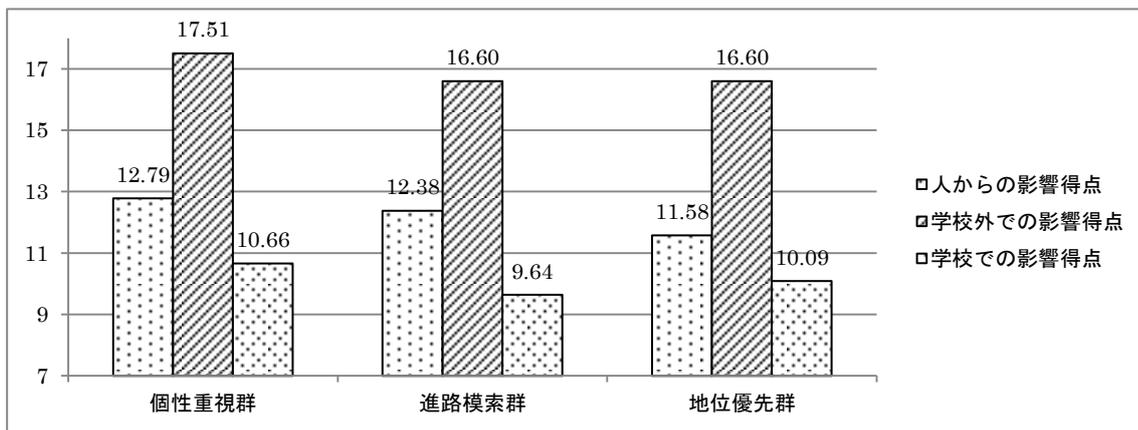


図 10 職業に対する考えの3つの群における影響得点

クラスタによって「人からの影響」、「学校外での影響」、「学校での影響」及び「総合的な影響」の各得点が異なっているかを調べるため、分散分析を行った。その結果、「人からの影響」については、5%水準で有意な群間差がみられた ($F(2,199) = 3.19 \quad p < .05$)。Tukey 法による多重比較 (5%水準) を行ったところ、「個性重視群」が「地位優先群」より得点が有意に高いという結果が得られた。それ以外については、有意な得点差はみられなかった。

4.2 調査Ⅱの結果

クラスタ分析で分類された3つの群の中から、それぞれ4人を抽出し、小学校以降の各学校段階で、将来どのような職業に就きたいと思っていたか、またその際、影響を受けた人や影響を受けた出来事について、所定の書式に自由に記述させる方法で調査した。以下に示した調査結果は、記述された内容に基づいて記載している。なお、矢印の太さは影響の大きさを示している。

4.2.1 個性重視群

個性重視群の調査結果を図11~14に示す。

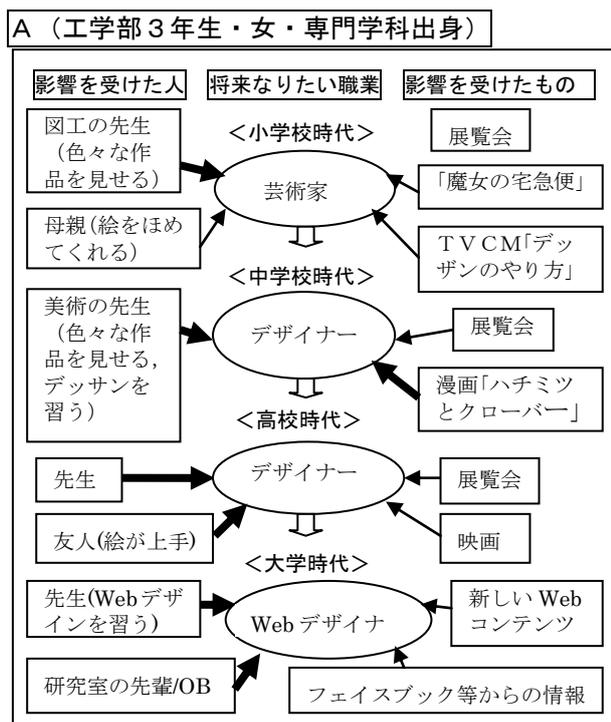


図 11 調査Ⅱの結果 (個性重視群A)

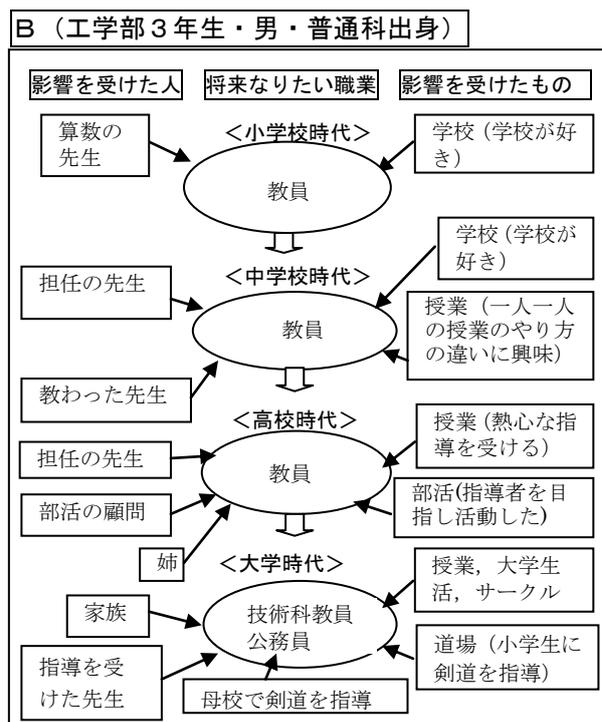


図 12 調査Ⅱの結果 (個性重視群B)

C (工学部3年生・男・専門学科出身)

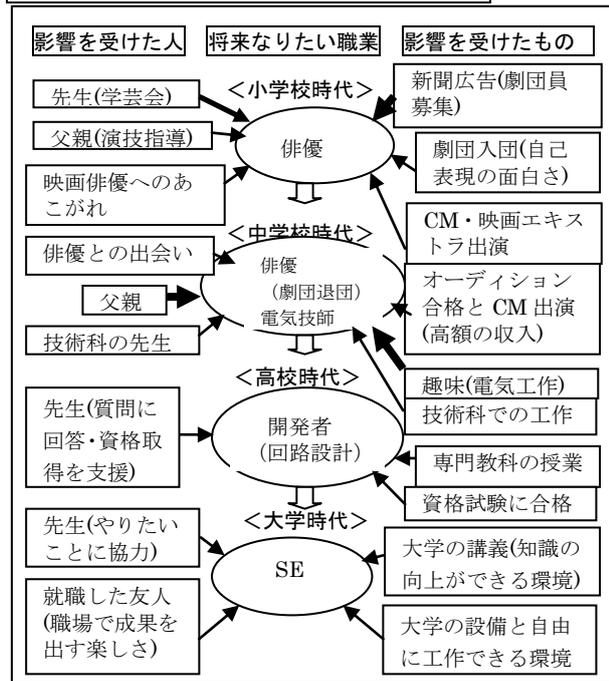


図13 調査Ⅱの結果(個性重視群C)

D (工学部3年生・男・総合学科出身)

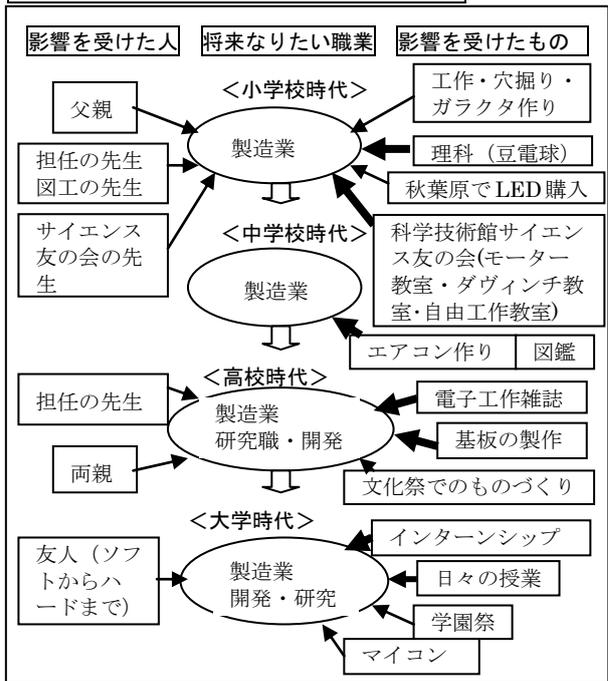


図14 調査Ⅱの結果(個性重視群D)

Aは小学校時代から芸術家になりたいと思い、その希望はその後一貫しており、年齢とともにデザイナーからWebデザイナーへとより具体的な職業をイメージしたものへと希望が変遷している。影響を受けた人としては、小中学校では図工や美術の教師の影響が強く、様々な作品に触れ、デッサンを学ぶなどの経験が芸術への興味・関心を広げることにつながっている。専門高校(工業科)から大学工学部へと進みデザインの専門を学ぶ中で、教師の影響は続き、同じ道を歩んでいる友人や先輩など周囲の人からの影響も強くなっている。影響を受けた出来事としては、美術館等での展覧会鑑賞のほか、アニメ、漫画、映画などである。

Bは小学校時代から一貫して教員を志望している。影響を受けた人は学級担任、部活動の顧問ほか指導を受けた教師であり、良い教師との出会いが進路選択の契機となり、自分の将来の姿を表すモデルとなっている。高校以降は、家族からの影響もみられ教師を職業とする親もモデルの一つになっている。影響を受けたものは学校生活であり、授業や部活動などで、教師が行う授業、指導する教師の姿からの影響がうかがえる。また、大学工学部入学後は、母校での部活動(剣道部)の指導、道場での小学生への指導など、学校や子供とかかわる体験からも影響を受けている。

Cは小学校時代から中学校時代の途までは俳優を目指している。影響を受けたきっかけは、劇団に入団し、自己表現の面白さを知ったことである。その後、オーディションに合格しCMなどに出演する機会に恵まれ、自分が認められた喜びや収入が得られた手応えにより、希望が形づくられている。この間に影響を受けた人としては、あこがれの映画俳優、出会いがあった有名俳優、演技指導をしてくれた父親、学芸会で指導してくれた先生などである。中学生時代に学力を心配した父親の判断で劇団を退団し、将来の希望が変化している。趣味である電気工作への興味や技術科の教師の影響を受け、専門高校(工業科)から大学工学部へと進学し、回路設計者やシステムエンジニアなどの技術者へと希望が変わってきている。この間に影響を受けた人は資格取得を支援してくれたり、ものづくりなどに協力してくれたりした教師、社会人となった友人との交流である。影響を受けたものとしては、専門高校や大学の授業、資格試験の合格、大学の設備を活用したものづくりの環境などである。

Dは小学校時代から一貫して製造業で働くことを目指し、総合学科高校、大学工学部へと進むにしたがい、研究職や開発部門へと志望がより具体化してきている。影響を受けた人としては、両親、小学校や高校の教師、サイエンス友の会の指導者、大学での友人との交流などである。影響を受けたものは小学校理科の授業、サイエンス友の会の活動、趣味としているものづくりなどであり、大学では授業やインターンシップ、学園祭などの日々の学業からの影響が進路をより明確なものにしている。

4.2.2 進路模索群

進路模索群の調査結果を図15～18に示す。

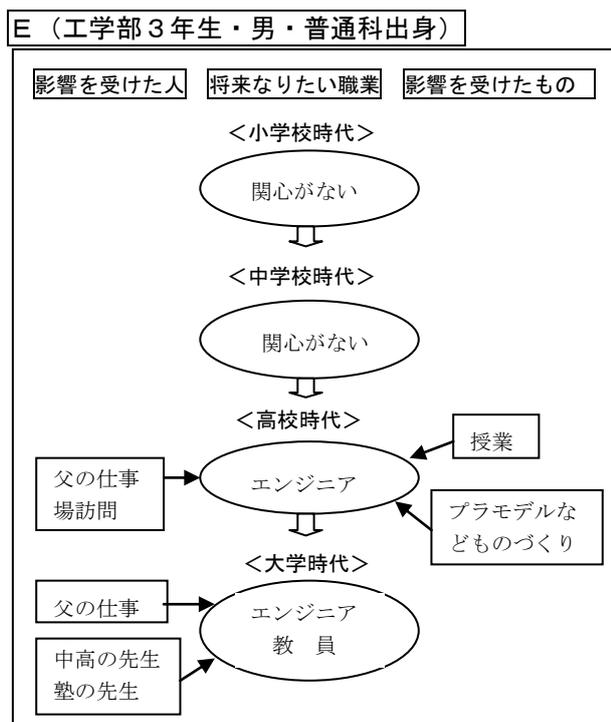


図15 調査Ⅱの結果(進路模索群E)

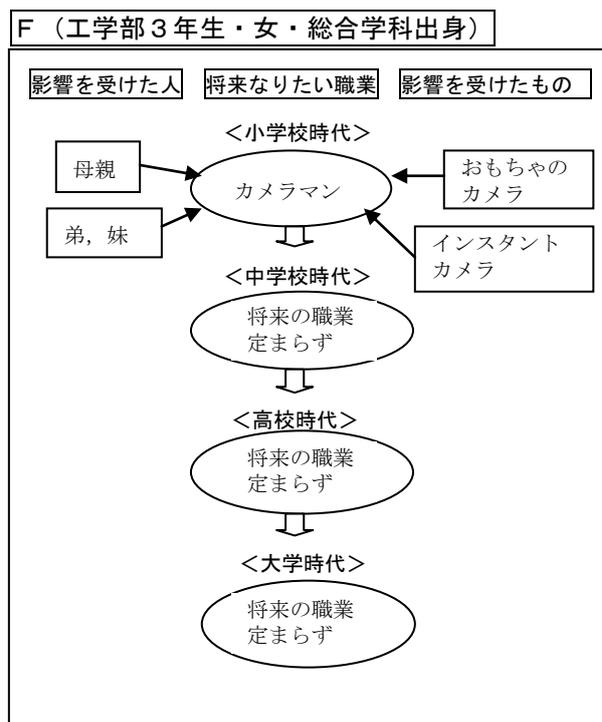


図16 調査Ⅱの結果(進路模索群F)

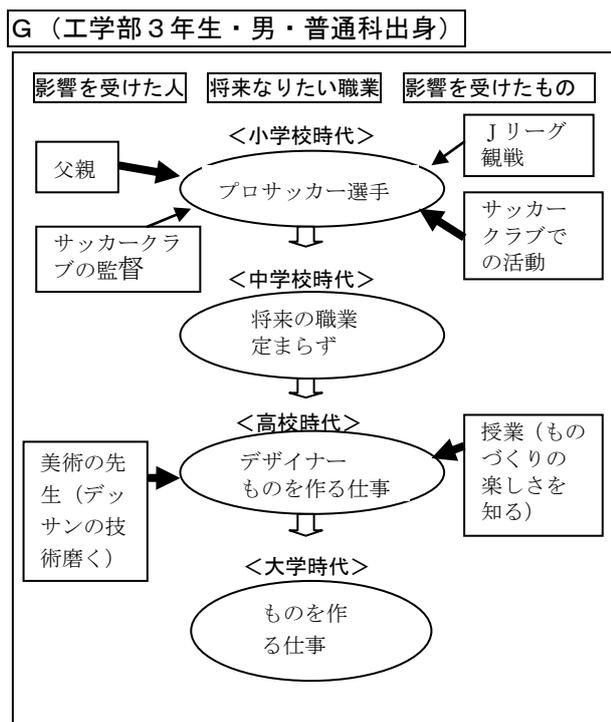


図17 調査Ⅱの結果(進路模索群G)

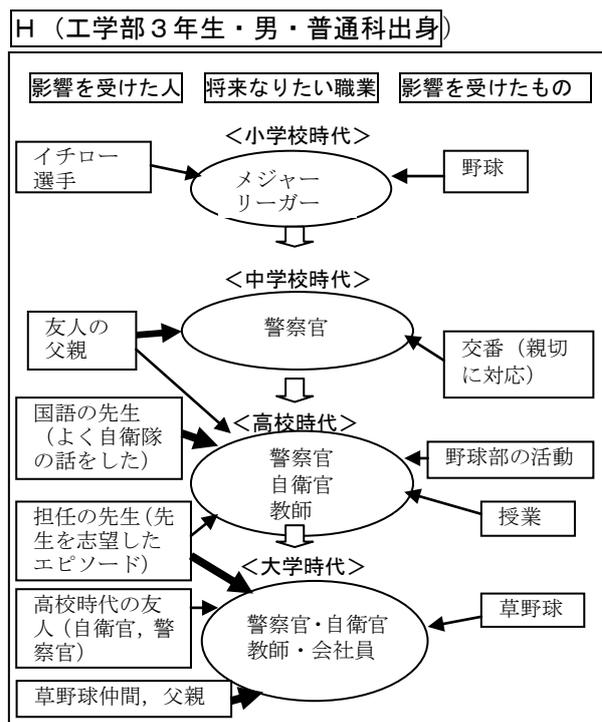


図18 調査Ⅱの結果(進路模索群H)

Eは小中学校時代には、将来なりたい職業についてあまり関心がなく、特に定まっていない。高校時代はエンジニアを目指している。父親の職場への訪問の機会、授業、プラモデル工作などの体験から影響を受けている。大学時代にはエンジニアまたは教員を目指している。教員への志望は中高校の教師や塾教師の影響を受けたものである。

Fは小学校時代には、カメラマンを志望している。写真を撮る母の姿へのあこがれ、おもちゃのカメラで弟や妹を撮って遊んだことの影響を受けている。その後、中学校以降、大学3年生の現在まで、将来の職業についてイメージできず、具体的に定まっていない。

Gは小学校時代には、プロサッカー選手になりたいと思っている。サッカークラブでの活動、父親やクラブの監督、Jリーグの観戦などから影響を受けている。中学校時代にはサッカー選手への夢は挫折し、将来の職業については定まっていない。普通科高校の時代にはデザイナーやものをつくる仕事に就きたいと考えている。美術の教師からデッサンの技術を磨き、ものづくりの楽しさを知ったことにより影響を受けている。大学工学部の現在も将来ものをつくる仕事に就きたいと考えているが、まだ具体化はしていない。

Hは小学校時代には、野球のメジャーリーガーになりたいと思っている。野球の練習や大リーガーの有名選手からの影響を受けている。中学校時代には、警察官である友人の父親からの影響や近くの交番で親切にされたという体験から警察官になりたいと思っている。高校時代には、警察官とともに自衛官、教師にも志望が広がっている。自衛隊への志望については、自衛隊の話をしてくれた教師から、教師への志望については、野球部の活動や授業、担任教師から聞いた教師を志したエピソードなどから影響を受けている。大学工学部の現在は、警察官、自衛官、教師に加えて会社員という選択肢も志望として考えるようになっているが、志望は具体化していない。会社員の志望については、野球仲間や父親の影響、警察官や自衛官については、これらの職業に就いた高校時代の友人の影響をそれぞれ受けている。

4.2.3 地位優先群

地位優先群の調査結果を図19～22に示す。

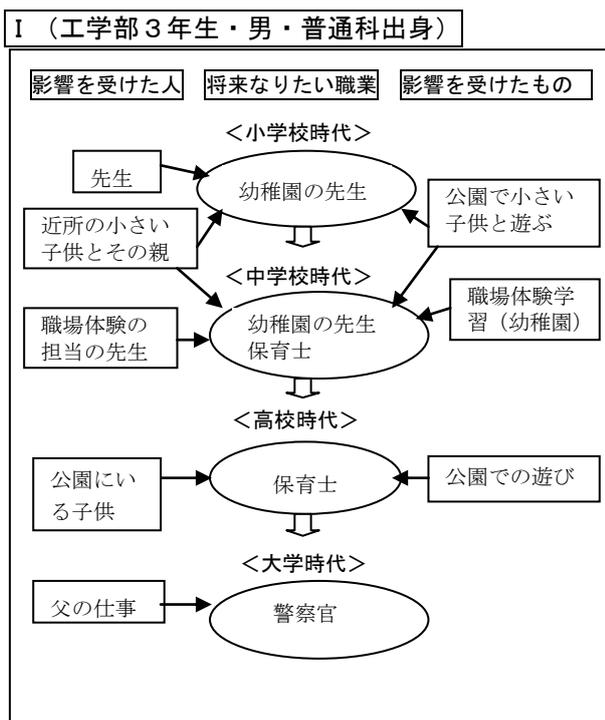


図19 調査IIの結果(地位優先群I)

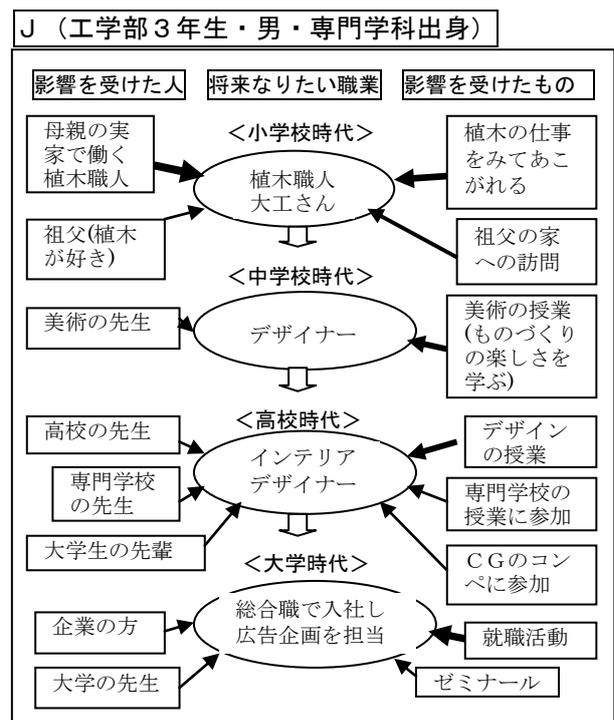


図20 調査IIの結果(地位優先群J)

K (工学部4年生・男・普通科出身)

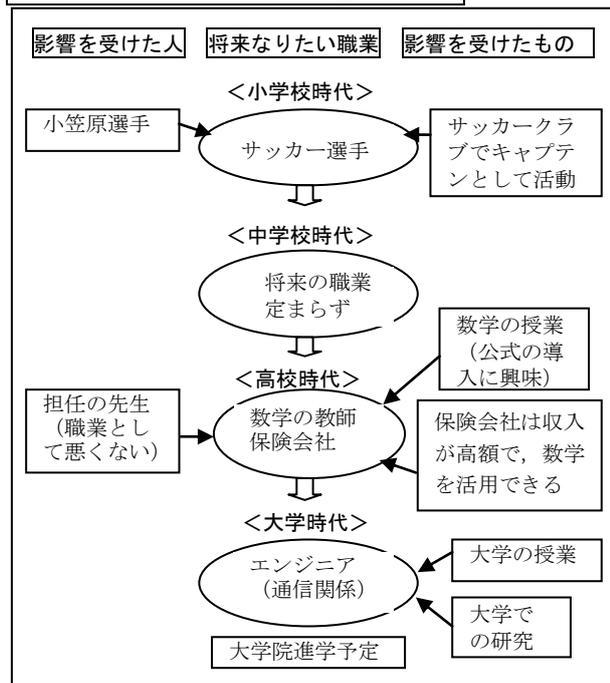


図 21 調査Ⅱの結果(地位優先群K)

L (工学部4年生・男・総合学科出身)

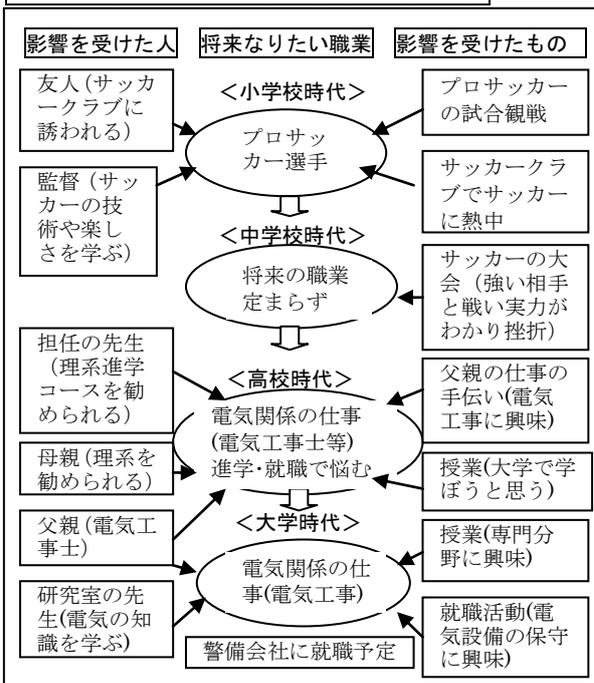


図 22 調査Ⅱの結果(地位優先群L)

Iは小学校から高校までは、幼稚園教諭あるいは保育士になりたいと思っている。影響を受けたことは公園で小さい子供と遊んであげた体験、中学校時代に幼稚園で職場体験学習を行った体験などである。大学時代には、父親の仕事の影響を受け、警察官に志望を変更している。

Jは小学校時代には、植木職人や大工さんになりたいと思っている。母親の実家でよく仕事をしていた植木職人の方や、植木の好きな祖父の姿から影響を受けての一種の憧れからである。中学校時代は美術の教師の影響を受け、美術の授業でデザインなどものづくりの楽しさを知り、デザイナーになりたいと思っており、専門高校(商業科)時代にはインテリアデザイナーを目指している。専門学科の教師やデザインの授業、専門学校での体験授業、大学生の先輩、CGのコンペに参加した体験などの影響を受けている。大学工学部に入ってから、ゼミの授業、就職活動等から影響を受け、総合職として企業に就職し、広告の企画を担当したいと考えている。

Kは小学校時代には、サッカークラブでキャプテンとして活動したことやあこがれのJリーガーからの影響を受け、サッカー選手になりたいと思っている。中学校時代には特に将来の職業は定まらず、普通科の高校時代には数学の教師になるか保険会社で働きたいと思っている。教師への志望は数学に興味があったことと、担任の教師の姿をみて職業として意識したことなどに影響されている。また、保険会社については、高収入を得られるというイメージをもったことと、得意な数学を生かせる進路であると考えたからである。大学工学部の現在は、大学の授業や研究から影響を受け、通信関係のエンジニアを目指し、大学院に進学する予定である。

Lは小学校時代には、友人に誘われサッカークラブに入り、監督からサッカーの技術や楽しさを学び、サッカーに熱中し、プロのサッカー観戦をするなどして、プロサッカー選手になりたいと考えている。中学校時代には、大会などに参加し強いチームと対戦する中で、自分の実力がわかり挫折感を味わっている。総合学科高校時代には、電気工事士などの電気関係の仕事に就きたいと考え、すぐに就職するか進学するか悩んだ末、大学進学を選択している。電気工事士をしている父親の仕事を手伝い興味をもったこと、理系の勉強を勧めた母親や担任の教師のアドバイスなどから影響を受けている。大学工学部で

は、授業や研究室での研究を通して電気の専門知識を習得し、就職活動で電気設備の保守の仕事に興味をもったことが影響している。卒業後は警備会社でシステム関係の仕事を行う予定である。

4.3 考察

以上の調査結果から明らかになったことを整理し、考察した。

4.3.1 職業観の全体的傾向

(1) 経済的側面

収入については、「安定した生活が送れる程度の収入で十分である」とする一方で、「できるだけ多くの収入が得られる仕事をしたい」とする傾向がある。両者は一見、矛盾する結果のようにみえるが、収入は多いに越したことはないが、現実的には生活の安定が図れる程度の収入以上のものはあまり期待できないと考えているのではないかと推察される。

経済的自立については、大多数の者が「親から独立して経済的に自立したい」と考えている一方、「就職しても安定するまでは親から経済的援助を受けたい」とする者も少なからずいる。先行き不透明な経済情勢や雇用状況に不安を抱き、経済的自立に見通しがもてないのではないかと考えられる。

(2) 社会的側面

社会的役割については、大多数の者が「社会のため人のために役立つ仕事をしたい」と考えており、職業を通して社会貢献することへの意欲や義務感を持っていると推察される。しかし、具体的な職業と社会貢献とが結びつかず、「職業を通して社会に貢献することが実感できない」者が少なからずいる。

社会的地位については、「将来管理職や幹部職員になり責任ある地位に就きたい」、あるいは「社会的に評価される地位につき、名誉を得たい」と社会的地位を重視する者と、「気楽に過ごしたいから管理職は目指さない」と社会的地位より私的な生活を優先する者と二極化している。

雇用形態については、大多数の者が正規社員を望んでいる一方、「自分に合った仕事なら非正規社員でもかまわない」という者や「人に使われるより自営や起業などで独立して働きたい」という者も少なからずいる。雇用形態については、帰属意識という社会的側面や経済的自立という経済的側面だけでなく、仕事を通じた個性の発揮という個人的側面とも関連づけながら検討する必要がある。

(3) 個人的側面

「専門性を身に付けそれを発揮できる仕事に就きたい」、あるいは「職業資格を取得しそれを生かした職業に就きたい」など、自己の能力を高め、職業生活の中で自己の個性や能力を発揮したいという者が多い。しかし、「自分のやりたい仕事以外はしたくない」と、職業における個性・能力の発揮を自己中心的に考えている傾向もみられる。

自己の適性については、「自分に合った仕事が何かわからない」と職業に対する自己の適性を把握できていない者が比較的多くみられ、「いろいろな職業を経験し自分に合った仕事を見つけない」と転職しながら自己の適性を見極めていこうとする傾向もみられる。

仕事と私生活とのバランスについては、多くの者が「平凡でも無事で安定した生活が送れるようにしたい」と生活の安定を求めており、「仕事より自分の生活を楽しむことを優先したい」とする者も比較的多い。

4.3.2 職業観の形成に影響を及ぼす要因

職業観の形成に影響を及ぼす要因として、「人からの影響」は教師からの影響が最も大きく、次に親からの影響が大きい。一方、地域の社会人からの影響は少ない。「学校外での影響」は自分の趣味から

の影響が最も大きく、次にインターネットの情報及び書籍からの影響が大きい。一方、地域での活動の影響は少ない。「学校での影響」は授業及び部活動からの影響が大きく、就業体験や職場体験からの影響はどれほど大きくはない。

4.3.3 職業観と職業観の形成に影響を及ぼす要因との関係

職業に対する考えについて、多くが肯定的回答をしている項目は「多くの収入が得られる仕事をした」、 「安定した生活を送れる収入を得たい」、 「親から経済的に自立したい」、 「正規社員として働きたい」、 「社会のため役立つ仕事をした」、 「専門性を発揮できる仕事をした」、 「無事で安定した生活を送りたい」などである。すなわち、正規社員になり経済的安定と自立を獲得し、自己の専門性を発揮しつつ社会に貢献できる仕事をし、無事で安定した生活を送りたいという考え方が、大多数の者のほぼ共通した考え方であると言える。

次に、職業についての考え方で異なる認識をもつものについて検討するため、多くの者が肯定的回答又は否定的回答をしている項目を除いて因子分析を行った結果、職業を通して社会的地位や名誉を得たいという「地位志向」因子、自分の生活を楽しむことを優先し職業に対する考え方があいまいで未成熟な「職業離れ」因子、自らの個性・能力を発揮したいという思いが強い「個性優先」因子の3因子が見つかった。

各因子の得点の男女の違いを比較したところ、「地位志向」因子の得点は、女子より男子の方が高いことが認められた。松本⁶⁾は、高校生の性による職業観の違いを検討しており、「地位条件志向で男子が、自己実現志向と生活安定志向で女子がそれぞれ有意に高い」としている。この結果は、本研究において地位志向が女子より男子の方が高いという結果と部分的に一致している。

3因子の得点を用いて、クラスタ分析を行い、3つの群に分類した。すなわち、職業に対する義務感や社会的意義についての意識が高く、職業を通して個性を発揮したいが、名誉や地位への欲求はそれほど高くない「個性重視群」、自由で気楽な生活を求め職業離れの傾向が強く、名誉や地位への欲求も低く、職業を通して経済的・社会的に自立を図ろうとする意欲に乏しい「進路模索群」、自由で気楽な生活を求め職業離れの傾向がある一方、地位や名誉への欲求は高い「地位優先群」の3つの群である。各群の人数の割合は46%、22%、32%である。

3つの群と職業観の形成に影響を及ぼす要因との関係を分析したところ、「人からの影響」については、有意な群間差がみられ、「個性重視群」が「地位優先群」より「人からの影響得点」が有意に高いことがわかった。

4.3.4 職業観の各群における特徴

3つの群の中から、それぞれ4人を抽出し、小学校からの各学校段階で、将来なりたい職業と影響を受けた人や出来事について調査したところ、各群において以下のような特徴がみられた。

(1) 「個性重視群」の特徴

「個性重視群」における特徴は、希望する職業が小学校時代から明確になっていること、目標がある程度一貫しており、年齢とともに徐々に具体化していることである。

また、その際影響を受けた要因については、親、教師、先輩、仲間など、周囲に目指すべき職業人のモデルが存在していること、趣味や習い事、部活動や地域の活動などで、自分が得意とする能力を発揮する機会があること、発表、受賞、資格取得など、成果が形となって表れ、評価されていることなどが特徴としてあげられる。

自分の興味・関心が明確であり、それを追求することの延長として職業を考えているが、自分の狭い世界の中で職業を考える傾向がみられ、社会とかかわる体験を通して職業に携わっている社会人から影響を受けるような機会は少ない。

(2) 「進路模索群」の特徴

「進路模索群」における特徴は、将来の職業に対して関心がもてず、進路が定まっていない時期があること、将来なりたい職業が具体化していかないこと、年齢とともに希望が絞り込まれるのではなく、逆に拡散していることなどである。

また、その際影響を受けた要因については、職業人のモデルとして親、兄弟、学校の教師、友人など身近な人から影響を受けている一方、趣味や習い事、学校での学習、部活動や地域の活動など、興味・関心を広げる体験が少ないことなどが特徴としてあげられる。

「個性重視群」と比べて、影響を受けたこととして調査用紙に記載している分量が顕著に少なく、エピソードとなる出来事や体験が少ない。特に、人から評価されるような成功体験が少ないことが特徴である。

(3) 「地位優先群」の特徴

「地位優先群」における特徴は、各学校段階で幾度か将来なりたい職業が変わっていることである。その時々家族や学校の教師、地域の人などから影響を受けながら志望が揺らいでいる。何をやりたいか、何が得意であるかということより、何になりたいということを優先して考えている傾向がみられる。

「進路模索群」と比べると、各学校段階で将来なりたい職業を検討している意志は感じられるが、「個性重視群」と比べると、自分が興味をもったものや得意とする能力を発揮し、評価される機会が少なく、希望する職業が具体化していかないことが特徴である。

これらの各群の特徴から、職業観の形成に必要な要素を選び出すと以下のことが考えられる。

- ・小学校時代から将来なりたい職業をイメージして目標をもつこと
- ・周囲に職業人のモデルがあり、啓発を受ける機会があること
- ・興味・関心を高める体験や学びの機会があること
- ・興味をもったものや得意とする能力を発揮できる機会と支援があること
- ・自分の能力が評価され自信を高める機会があること

5 まとめと今後の課題

大学生に対して職業についての考え及びその際影響を受けたことなどについて調査したところ、以下のことが明らかになった。

- ① 多数の支持が得られている共通する職業観は、正規社員になり経済的安定と自立を獲得し、自己の専門性を発揮しつつ社会に貢献できる仕事をし、無事で安定した生活を送りたいという考え方である。
- ② 職業観について、共通する考えを除き、分類したところ、「個性重視群」、「進路模索群」、「地位優先群」の3つの群に分けられた。各群の人数の割合は46%、22%、32%である。
- ③ 職業観の形成に影響を及ぼす要因として、「人からの影響」は教師及び親、「学校外での影響」は自分の趣味、インターネットの情報及び書籍、「学校での影響」は授業及び部活動からの影響がそ

れぞれ大きい。また、職業観の各群との関係では、「人からの影響」は「個性重視群」が「地位優先群」より大きい。

- ④ 「個性重視群」の特徴は、希望する職業が小学校時代から一貫しており徐々に具体化していること、周囲に目指すべき職業人としてのモデルが存在していること、自分が得意とする能力を発揮する機会がありその成果が評価されていること、自分の狭い世界の中で職業を考えがちなことなどである。「進路模索群」の特徴は、将来の職業に対して関心がもてず進路が定まっていない時期があること、将来なりたい職業が具体化していかないこと、職業人のモデルとして身近な人から影響を受けている一方、興味・関心を広げる体験や成功体験が少ないことなどである。「地位優先群」の特徴は、各学校段階で幾度が将来なりたい職業が変わっていることであること、何をやりたいか、何が得意であるかということより、何になりたいかということ優先して考えていること、自分が興味をもったものや得意とする能力を発揮し、評価される機会が少なく、希望の職業が具体化していかないことなどである。
- ⑤ 職業観の3つの群の特徴から、職業観の形成には、小学校時代から将来なりたい職業をイメージして目標をもつこと、周囲に職業人のモデルがあり啓発を受ける機会があること、興味・関心を高める体験や学びの機会があること、興味をもったものや得意とする能力を発揮できる機会と支援があること、自分の能力が評価され自信を高める機会があることなどが必要と考えられる。

本研究においては、職業観の3つの群について、調査Ⅱで事例を通してそれらの特徴を検討したが、調査対象者を拡大し、統計的な信頼性を高める必要がある。また、調査Ⅱについては、大学生を対象に、小学校以降の各学校段階における当時の自分の考えや出来事について記憶を掘りどころにして調査したが、各学校段階における児童・生徒を対象にして、同様の調査を行い、検証することが必要である。さらに、これらの調査結果を踏まえ、どの時期にどのような支援を行うことが職業観の形成に役立つかなどの支援策について、今後検討することが必要である。

【参考文献】

- (1) 中央教育審議会、「今後の学校におけるキャリア教育・職業教育の在り方について（答申）」，pp3（2012）
- (2) 尾高邦雄，「尾高邦雄選集 職業社会学」，夢窓庵，pp50-53（1995）
- (3) 加部祐三，田村鍾次郎編，「勤労体験学習の理論と実践」，文教書院，pp25-27（1978）
- (4) 国立教育政策研究所生徒指導研究センター，「児童生徒の職業観・勤労観を育む教育の推進について（調査研究報告書）」，pp20-23（2002）
- (5) 中西信男，広井甫編著，「進路指導の心理と技術」，福村出版，pp71-73（1981），引用箇所の執筆者は橋本昭次
- (6) 松本浩司，「高校生の職業観の構造と形成要因」，キャリア教育研究，26，pp57-67（2008）
- (7) 巽公一，「生き方を主体的に設計する力を育てる進路指導の研究」，東京都教員研究生報告，pp6-18（1990）

【資料】 職業観についての調査

該当するところに○をつけてください。

No		質問事項	そう思う	ややそう思う	あまり思わない	まったく思わない
1	職業に対する考え	できるだけ多くの収入を得らえる仕事をしたい				
2		安定した生活が送れる程度の収入で十分である				
3		親から独立して経済的に自立したい				
4		就職しても安定するまでは親から経済的援助を受けたい				
5		正規社員になり働きたい				
6		自分に合った仕事なら非正規社員でもかまわない				
7		気ままに暮らせれば非正規社員でもよい				
8		将来管理職や幹部職員になり責任ある地位に就きたい				
9		気楽に過ごしたいから管理職は目指さない				
10		社会的に評価される地位につき、名誉を得たい				
11		社会のため人のために役立つ仕事をしたい				
12		職業を通して社会に貢献することが実感できない				
13		自分のやりたい仕事以外はしたくない				
14		専門性を身に付けそれを発揮できる仕事に就きたい				
15		職業資格を取得しそれを生かした職業に就きたい				
16		自分に合った仕事がかかわからない				
17		いろいろな職業を経験し自分に合った仕事を見つけたい				
18		人に使われるより自営や起業などで独立して働きたい				
19		平凡でも無事で安定した生活が送れるようにしたい				
20		仕事より自分の生活を楽しむことを優先したい				
No			たくさん影響を受けた	少し影響を受けた	あまり影響を受けなかった	全く影響を受けなかった
21	職業を考えるととき影響を受けた人	親				
22		兄弟や親せき				
23		友人				
24		教師				
25		地域の社会人				
26		その他	具体的に記入()			
27	職業を考えるととき影響を受けたもの	家事などの家庭での仕事				
28		自分の趣味				
29		マスコミの情報				
30		インターネットの情報				
31		書籍				
32		地域での活動				
33		習い事				
34		学校での教科の授業				
35		学校で行った就業体験や職場体験				
36		部活動での経験				
37	生徒会活動や委員会活動での経験					
38	属性	性別	男	女		
39		出身高校の学科	普通科	専門学科	総合学科	
40		大学の学部	商	政経	外国語	国際 工
41		学年	1年	2年	3年	4年 その他